

第二章

宗 教

——なぜ書かなかったのか——

富山太佳夫



1900年頃のロンドンの浮浪児

第一節 冒険小説と貧困小説

貧しさを書く——人間の成長や愛、悲劇や幸福ではなくて、貧困を描くとはどういうことなのか。幸福な結末を予感させることのない極度の困窮を描いた小説を誰に読ませようというのだろうか、何のために？ 十九世紀のイギリスで、とりわけ首都のイースト・エンドに蔓延していた貧しさを文学の言説の中にからめとるというのは一体何であつたのだろうか。世紀末の貧困を執拗に描き続けたギッシングの小説を読みながら、そこに描かれている貧困のネットワークに殆ど言葉を失いながらも、絶えず問い続けなくてはならないのがこの問題である。彼の描き出した何重にも交差する貧困の風景はイギリスの文化の中の何を表象しているのだろうか。いや、そのことを問う以前に、そもそも貧しさを書くとき、その対象は自明の了解事柄としてそこに在るものなのだろうか。

金銭と経済をめぐる話題は、世紀末の自然主義の文学の中だけではなく、それから最も遠いところに位置する子ども向けの冒険小説の中にもあふれていた。世紀末の冒険小説家の中でも拔群の人氣を誇っていたG・A・ヘンティの『ロバートとものにプレトリアへ』（一九〇二年）はこう書き出されている。

サマセットシャのウェイバーフィールドの牧師館は悲しい朝

を迎えていた。とりたてて贅沢な暮らしをしてきたわけではなかったが、牧師のジョン・ハーバートンにはミッドランドの銀行の株から来る個人的な収入もあったし、この銀行自体が安定した優良なものとみなされていた。ところがその日の朝、最初に彼の眼に飛び込んできた新聞記事は、「パーミンガム・コヴェントリー銀行崩壊。重大なる債務超過か。混乱広がる」というものであった。

「何ということだ」と、最初の驚きと嘆きを乗り越えたところで牧師はつぶやいた。「それでもまあ、まだ教会からの収入があるわけだから……」（第一章）

牧師はただちに儉約のプランを練り始めるが、そのうちのひとつに息子の学校中退が含まれている。息子の方は父親の窮状を察して、いかにも冒険小説の主人公になるのにふさわしい男の子らしい言葉を口にする。「僕のことなら、何とかやれるよ。優等生になる見込みなんてなかったけど、ラグビー校をやめるのがさびしくないわけじゃないけど、お父さんが馬も馬車も、あれもこれも手離さなきゃいけないのにくらべたら、何でもない」（第一章）。この小説では、少年が冒険に乗り出すことをあと押しする家庭の経済的な破綻が、あまりにも対照的に、同時代のギッシングやアーサー・モリスンの貧困小説では底無しの転落への契機となってしまうのだ。しかし、そのような極端な対比性と併行して、経済的な破綻が一連の展開のきっかけにな

り得るという発想が文学の構造決定に絡んできていることは疑い得ないだろう。

『宝島』（一八八三年）の場合には、経済的次元の介入がさらに極端なかたちをとる。そもそも宝島という名称自体が異例であると言わねばならぬ。ヴィクトリア時代の冒険小説の典型的なパターンというのは、主人公の少年が難破や、見知らぬ土地での蛮族、猛獣との闘いを体験して、みずからの勇氣と正義心を証明し、それによって大英帝国のすばらしさを体現する人物となる過程を描くということであった。もちろん彼はその成功報酬を手にはするものの（宝物や報奨金、あるいは結婚のかたちで）、最後に手にすべき目標としての〈宝〉をまず最初にかかげるといふのは、多少なりともパロディ風味の露悪性を正面に押し出すことでもあったろう。作者のR・L・ステイヴンソンはそのことを意識していたはずである。主人公の少年には「不思議な島や冒険」、「蛮族」や「危険な動物」を予期させる一方で、プリストルの港の人々は航海の目的が「宝物」だと信じていることにしている。登場人物のひとりの台詞、「宝物なんてどうでもいい！俺の頭を熱くするのは海の栄光だ」（第七章）は、冒険小説の定式とそのパロディの間に成立した言説と読むこともできるだろう。

そのようなパロディをかいして経済的次元がもっとあからさまに侵入してくるのが、海賊シルヴァー船長の人物造型である。

彼はロング・ジョン・シルヴァーと呼ばれていて、片足がない。もっとも私の方としては、それを有利な点と判断したがね。彼は不滅のホークの指揮下で働いているときに祖国のために片足をなくしたんだ。それなのに、年金がもらえない。まったく何というひどい時代なんだ！……彼は銀行に口座を持っていて、借出し超過になったことはない。宿のやりくりは奥さんに任せるらしい。その奥さんというのは黒人だから、きみや僕のような独身男としては、彼が海の放浪に戻りたくなかったのは、健康のこともあるだろうが、奥さんのせいじゃないかと勘ぐりたくもなるね。

（第七章）

『宝島』を単純かつ典型的な冒険小説とみなすことの愚は、プリストル港を出る前のこの一節が十分に教えている。年金云々の話といい、銀行の口座の話といい、経済的次元のあからさまな侵入は、世紀末のイギリス文学の中ではもはや決して異物とはみなされなくなっていたと考えるとよいだろう。問題は、そのような経済的次元の、つまり金銭問題の侵入がどのようにして描かれるのかということだ。

冒険小説の主人公となる少年が、勇氣と正義心と公正感を身につけながら大団円に向けて突き進み、最後にはしかるべき報酬と幸福を手にするのとは対照的に——『宝島』の場合であれば、「我々全員が宝物の分け前を十分に手にし、それぞれの性

格に應じて賢明に使ったり、浪費したりした」(第三十四章)ということになる。宝探しの冒険にかかわった大人にしても、その分け前を手にして引退生活を楽しむ者もあれば、「上昇志向」に突き動かされて努力し、今では船主となつて、「結婚し、一家の父」となる者も出てくるし、せっかくの報酬をまたたくうちに浪費した挙げ句、今では「田舎の少年たちの……大の人氣者となり、日曜日や聖人の日には教会で堂々と歌をうたつてゐる」(第三十四章)者もいる——ともかくそれとは対照的に、世紀末の貧困小説に登場する少年たちは正反對の負の属性に囲まれて、彼らなりの負の《冒険》に乗り出すことになる。

『宝島』を世紀末の冒険小説のひとつの代表作とみなすならば、貧困小説の代表作としてそれに対置できるのはアーサー・モリスンの『ジェイゴアの少年』(一八九六年)ということになるだろう。イースト・エンドの中でも際立った極貧地区で始まるこの小説の主人公は、始まると同時に盗みや暴行事件に巻き込まれてしまうことになる。正確には、彼が盗み、暴行に走るのだ。しかしそのことは、この驚くべき小説の中にプラスの価値観が示唆されていないということではない。スラングを多用して書かれた母と少年の次のようなやりとりが既に第一章に挿入されているからだ。

「……うちはそういう人たちとは違うんだよ、ディッキー、あんたにも分かつてるでしょ、お母さんはいつだってちゃんと

した正直な生き方をしてきたのよ。あんただって——」

「分かつてるよ。お母さん、前にそう言ってたんだから、お父さんに——聞こえたんだ。お父さんが黄色い石みたいなのを持って帰ったとき——ネクタイのピンだろ。あれ、どこで手に入れたんだよ？ お父さん、何ヶ月も何ヶ月も仕事ないんだよ。家賃を払ったり、ルーイのパンやミルクをかうお金、どこから来るの？ ばくが知らないと思つてんの？ 子どもじゃないんだよ。分かつてるよ」

「ディッキー、ディッキー！ そんなこと言うもんじゃない！」
よんだんだ眼に涙を浮かべた母親はそれだけ言うのが精一杯であつた。「よくないことよ——浅ましいし。おまえはいつもちゃんとして正直でいてくれないと、ディッキー、そしたら、おまえは——成功できるから」

「正直なやつらなんて、バカだよ。……ばくは大きくなつたらお偉いさんのような服を手に入れて、上の奴らの仲間になるんだ。デッカくバクするんだから」

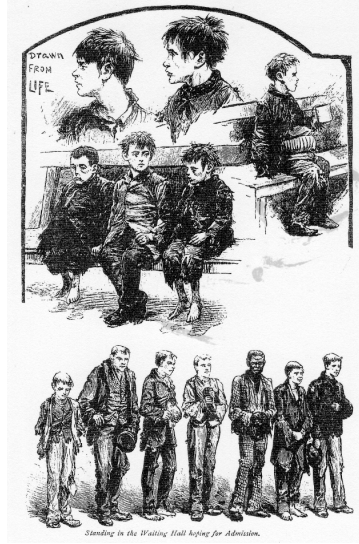
「暗い牢屋に何年も何年もぶちこまれちゃうよ……」

(第一章)

ここにはロマン主義が発見したはずの純真無垢な少年像の痕跡も、多分にフィクショナルな家庭の天使という子ども像の影響もなく、世紀末のロンドンの貧困地区に実在したかもしれない少年の現実的な表象が存在するだけだ(図①)。この少年にと

つては、このような犯罪社会の中で生き抜くことこそが生きるための〈冒険〉となる。しかも、すぐあとの第二章でそのような冒険が始まってしまうのである。

救世軍の活動やトインビー・ホール他のセツルメント運動を頭において構想されたと思われる「イースト・エンド向上運動ならびに全知協会」の設立式が、そのための舞台となる。生活上、思想向上、人間性拡大を謳い文句にするこの団体の設立式とその御祝いの場にこっそりともぐり込む少年の目的は、まず第一に、そこで出されるおいしいケーキを盗み喰いすることであった。少年はそれには成功する。そのあと彼は、御祝いの演説をして御満悦の司教の時計を盗むことになる。かりにこのエピソードだけならば、幼い少年のあまり深くとがめるほどのことはない窃盗事件という解釈も成り立つのかも知れないが、



図① 社会事業家・慈善家T・J・バーナードによって創始された孤児院への入所を待つ子どもたち

『ジェイゴアの少年』はそのような柔和な解釈を拒絶してしまう。読者は暗澹たる雰囲気の中にたたき落とされるのだ。

そのような方向に読者をひきずってしまう力は、少年の窃盗に由来するというよりも、両親が彼の窃盗の結果を引き受けるときの言動に由来すると思われる。「お母さん——お父さん——見て！ やったよ！ 時計が手に入った——赤いやつ！」この純粹な自慢と喜びの言葉に対して母の返す言葉は、既に見た彼女の考え方を追認するものとなる。「おまえはなんて浅ましい、よくない子なの。本当に、ジョシュ、この子は——この子は悪人になってしまわう」。その息子をいきなりベルトで殴りつける父親の乱暴さにしても、ことによっては許容せざるを得ないものかもしれない。しかし、みずからの行動をきびしくとがめられた少年が部屋を飛びだしてしまったあとの二人のやりとりは、この小説の描き出す貧困社会のやりきれなさを一挙に浮上させる。

少年の姿が消えると、彼女はためらいがちにこう言った。

「すぐに処分する方がいいんじゃない、ジョシュ」

「ああ、行ってくる」時計を片手でもてあそびながら、ジョシュが答えた。「いいやつだな——最高級品だよ」

「ウィーチのところであつたりはしないでしょうね、ジョシュ。あいつは——しみつたれだから」

「そんな心配はいらんよ。これならオクストンでも大丈夫だ」

(第三章)

子どもの犯罪、そして大人の犯罪、しかもどちらかと言えば、殺人のような犯罪ではなく、しみつたれた窃盗などを書き込むというのは、ディケンズの例を挙げるまでもなく、貧困社会を描くときの常套的な手段であつた。大きな宝物を導入するのは冒険小説が必要であつたし、殺人を導入するには推理小説の形式が有効であつたのに対して、貧困社会を描くための素材としてはしみつたれた犯罪と人間のいじましい行動、いじましい心理を使いまわすのが定番であつた。この考え方はモリスの小説の結構を説明するだけではない。ギッシングの小説の中にもこの鉄則によって説明できる部分が多量にあることは、『ネザー・ワールド』（一八八九年）ひとつを考えてみても十分に分かることである。そこにあふれている夥しい数の嘘のつき合いは、ジェイン・オースティンの小説世界におけるギッシングのように、小さな共同体をひそかに支えるものとして機能しているのではなく、相互の人間関係を決定的に破壊してしまうことではないものの、そうした嘘によってささやかな利益を手にしうとする登場人物たちのおぞましさを効果的に印象づける働きをしている。ギッシングの小説を読んだあとに快感が残ることはほとんどない。むしろ、あとに残るやりきれなさこそが——世紀末イギリスの社会の困窮と困惑を描く作品が残すやりきれなさこそが——彼の小説の魅力であると言うべきかもしれない。

考えてみれば、このようにねじれた魅力をもつ作家は、イギリス小説史の中には、他に例がない。

第二節 職探し、引越し

世紀末の貧困小説を支えているもうひとつの重要なモチーフが職探しである。名前をもたない浮浪者は困窮の風景のひとつの構成要素として以外には使にくいという小説作法上の要請も絡んでいるだろうが（『ジェイゴアの少年』の書き出しはそのような風景化の一例である）、モリス、ギッシング他の世紀末の作家たちの作品で好んで前景化されるのは新たに職を求める人、転職を願う者、そして失職して職探しをしている者たちの苦しい表情である。『ジェイゴアの少年』でも、かつては左官業についていた少年の父は今失職中という設定になっている。「あなたが定職についてくれるといんだけど、ジョシュ、昔のように——本当に、定職があれば」（第一章）。モリスはこの失職、職探しの問題をいたるところに発見してしまう。短篇集『貧しい街の物語』（一八九四年）では随所にこのモチーフが顔を出している。わずかでもお金を手に入れようとして、パプの裏手の部屋でのボクシングの試合に出る少年の登場する「三ラウンド」には、「ネディ・ミルトンには闘うだけの体力はなかった。半端な仕事でもいいからと一日歩き回って、もう足が棒。十八歳の少年が朝から夕方まで食事抜きというのは辛

い。「改宗」の主人公は雑貨商の使い走りから始めて、窃盗犯となり、次には警察の密告人となり、そして偶然に宗教に目覚め、そのあと足の悪い老婆のものを盗む。「打つ手もなく」では、ロンドンの港湾ストに参加した労働者たちの困窮ぶりが描かれる。「ストライキに参加した者の多くは参加手当があるわけでもなく、行進したところでそれが腹の足しになるわけでもなく、仕事があるかもしれないというので、マンチェスターやバーミンガム、リヴァプールやニューカッスルに向けて歩き出した」。そのような失職者の行進の中では、ひとりがつづ正論にしてもひたすら虚ろに響くだけである。

労働者がみずからの額に汗して生みだした富と贅沢と放縦の中に立ちつくし、空腹でいるというのは、どういうことか。同士諸君、立ち上がるべき時が来た。奴隷を追いたてる傲慢な資本家どもをひざまずかせるべき時だ。

この発言の妥当性に泥を塗ってしまいういじましさは、もちろん既に検討した窃盗や嘘からしみ出してくるいじましさとは異質のものではあるにしても、その両者は連動し得るはずである。連動して困窮の雰囲気強化しているはずである。さらにここに飲酒や売春の話が加味されるならば申し分ないはずであるが、モリスンもそのことを見落しているはずがない。『貧しい街の物語』の声価を決定した感のある巻頭の短篇「リザラント」

の役割はそれを導入することであつた。十七歳という年齢で作品に登場することになる彼女は「ピクルスを作る工場で働いていた」。週給は十シリング。結婚した相手には定職がない。「ピリーは失業者の集会に出かけて、ロンドン塔を襲撃しようといった提案に拍手をしたりしていた。もつとも、棒先にハンカチをくくりつけて行進しながら、邪魔するオマワリはぶち殺してやるなどと氣勢をあげることはしなかった。そうした行進の結末がどんなものになるのかを承知していたからだ」。彼女が二十一歳を迎える数ヶ月前には三人目の子どもが生まれるが、「ピクルス工場はしばらく前に彼女をクビにしてしまい、今ではときどき掃除婦の仕事をするくらいだ」。そうした窮状の中で、同居していた夫の母が死に、かろうじてその葬式をすませたあと、彼女は最後の選択を強要されることになる。

「ともかく——俺はかまわねえ。やれよ」

「なんですって」と、リザラは啞然として顔をあげた。

「私が街に立つて、やれるって、あなたは言うの？」

「あたり前だろ。他にも一杯やってるじゃねえか」

「ピリー……どういふつもりなの？」

「どうもこうもあるもんか。他にも一杯やってるって言ってるんだ。やれよ——いつまで清純スラしてんだよ。……やれよ——その頭をぶつとばされなくなったら、金をかせいでこいよ」

確かにギッシングの作品にはここまで極端な表現はないにしても、生きるために売春するという行動が彼女の射程内にあったことは歴然としている。『無階級の人々』（一八八四年）は、主人公のひとりアイダの母が、彼女を育て、教育を与えるために売春をしていたことが学校に知られて、この少女が放校になることから物語が始まるのだから。『学校の連中が私のことを知ったのよ、それでアイダがやめさせられたんだわ』、ロツティはそう言って絶望的な顔をした。……『この病気が治ったら、もうやめる——神様、本当です！ 正直な生き方に戻ります、その方法さえあったら』（第二章）。結局この母親は、願い通りに新しい職を見つけることもなく死んでゆく。放校という、ある意味では失職に対応するような経験をしたあとのアイダは何回も転職を重ね、母と同じように街娼も経験し、挙げ句の果てに冤罪で六ヶ月の刑を言い渡されることになる。作者がこの少女のために用意したのはウエイマーク青年の心もとなない言葉でしかなかった。「多くの理想の女性というのは、人生の暗い秘密をとことん知りながら、それでも純粹な心を持っているひと——アイダ、きみのように」（第十七章）。常識的には、このような愛の言葉の前後にはその意味を支えるコンテクストが展開するはずであるが、貧困小説『無階級の人々』はそのような期待を裏切ってしまう。そして、そのように期待を裏切ってしまうことによって、経済的な窮状が人間を奈落にひきずり込んでしまうさまを表象するのである。いわゆる貧困の情景の

描写だけに終始するのであれば、ピクチャレスクという言葉でくくられるような表象の提示に行きつくだけになりかねないだろう。それはスケッチという言葉で指示されるもののレベルにとどまってしまうかねない。しかし、貧困とは決して静止した画像ではない。動きつづけ、変化しつづけ、まわりにあるものを引きずり込んでゆくコンテクストなのだ。そのような性格をもつ〈渦〉なのだ。

そのような渦の中で生きる人々を描くにあたっては安定や静止といったモチーフほど違和感を生みだすものはない。ギッシングの作品は——『ヘンリー・ライクロフトの私記』（一九〇三年）は例外としていいかもしれないが——驚くほどの不安定な動きにあふれている。田舎の貴族や地主を中心とした共同体やそこに展開する自然につきものの不変性は、彼の作品からは排除されてしまう。彼の都会小説を埋めつくしているのは、絶えず不安定に動きまわる人々だと言っているだろう。彼らは職を失い、職を求め、繰り返し転居し——ヴィクトリア時代には、中流階級以上の持ち家率も決して高いものではなく、転居は常態化していた——何か新しいことを試みようとする。その新しい何かは、ときには階級性や教育、教養を度外視して作家になろうとする欲望のかたちをとったり、女性の権利を主張しようとする動きのかたちをとったりする。短篇「蜘蛛の巣の家」（一九〇〇年）の中で語られる印象的な持ち家願望は、実のところ、ギッシングの作品に蔓延する不安定な動きへの対抗的な願

望である」と解釈すべきかもしれない。

今までずっと自分自身の家を持つのはどんなに楽しいことだろうと思っていました。本当の、自分の持ち家ですよ。借家なんかじゃなくて、そこで暮らして死んでいける家ですよ。誰にも自分を追い出す権利なんかないって思える家です。何度も何度もそれを夢に見て、どんな気持ちになるものか想像してみようと思いました。大きな、立派な家じゃなくてもいいんです——ほんとに、そう。どんなにちっちゃくても構やしなかった。ほんとに、私のような者にはちっちゃいほうがいいんですから。

こう語る人物も長い間借間暮らしを経験してきているが、それはギッシングの貧困小説に登場してくる人物大半の運命でもあった。挫折の頻出する人生を考へつくことにたけていた彼は、この人物とは反対に、立派な持ち家を手に入れても、そこに安住することのできない人物までも造形してみせている。すなわち、人生の不安定な動きを押しとどめて安定を約束するはずの持ち家がさらなる不安定さにつながってしまうような事例まで捻出して作品の中に埋め込んでいるのである。ここまで来ると、不安定な動きにとりつかれた人物、状況、筋を考察することがこの作家にとっては中心的なオプゼッションになっていたのではないかと勘ぐっていいくらいだ。この場合の例は、『余計者の女たち』（一八九三年）に登場するウイドソン。

彼は急死した兄の遺産として立派な家屋敷と年六百ポンドの収入を手にするようになる。「たった一日で——一時間で——私は奴隷状態から自由になったのです。貧乏から安楽以上の生活になったのです」（第五章）。その彼が自分の持ち家について、こう述懐する。

今までずっと自分自身の家を持ちたいと思っていましたが、それが実現するなどと考えたことはありませんでした。大体人間なんて、自分に合った住まいがありさえすれば他のことは気にしないものでしょう——少なくとも、独身のときには。私はいつもひとりで暮らしたいと思っていました——つまり、赤の他人と一緒にではなくて。前にも話しましたが、私は人づきあいがいい方じゃない。自分の家を手に入れたときにはオモチャをもらった子どもみたいなものでした。嬉しくて眠れませんでしたよ。

（第七章）

しかし、この家でのモニカとの結婚生活は、結局のところ彼女の悲惨な死に辿りついてしまい、この家が安定と静止のシンボルとなることはないのである。

ウイドソンは持ち家と結婚のうちに安定と静止を見出せなかっただけではない。彼の人生そのものが、職歴そのものが安定とも、安定的な上昇化とも無縁のものだった。父はブライントンの競売人であったものの、仕事がうまくゆかず、結局は馬車に

はねられたのがもとで死亡。母は下宿屋を始め、彼は「十四歳のときに父のパートナーであった人物の事務所」に出され、「十九歳になるまで使い走りの手伝いにすぎなかった」。そして、「自分の将来がどうなるのか見当もつかなかった。事務所の仕事なんて、仕事という仕事が大嫌いだ。でも、どっちを向いても出口なんて見えやしない。……事務員の生活なんて——地位のあがる見込みのない事務所人生なんて——ひどい運命だ！」（第五章）。そうした人生を送っている最中に、一番仲の悪かった兄（株式仲買人）が急死して遺産を残し、彼の人生は一変するのである。彼に与えられるのは、ゆうに一冊の小説になるほどの変化にあふれた人生の軌跡なのだ。

服地屋で働いている二十一歳のモニカにしても、死ぬほど酷使され、タイプライターの打ち方を教わってもつと有利な仕事に転職したいと考えている。『余計者の女たち』では、筋の展開と併行して、転職と転居の話がでてくる。いや、この小説に限ったことではない。『無階級の人々』にも似た例がいくらでも見つかるだろう。そのいい例が主人公となるウェイマークであって、学校の教師として登場しながら、その学校の運営のあり方に嫌気がさして、次には貧民街の家賃の取り立て係として働き、そのあとは「貸本屋のアシスタントの地位を手に入れた。賃金は安かったが、それでも夜は自由になれた」（第三十一章）。そのあとの彼は小説家に転身してゆく。家賃の取り立てのためには貧民街を探訪する彼の眼の前には、おそらく世紀末の読者が

予期したはずの悲惨な光景が展開するので、オクテイヴィア・ヒルやチャールズ・ブースたちの社会調査と比較して、その社会的な表象の意味を探ることも十分に可能ではあるだろうが、作品内在的な見方をとるならば、登場人物を予想外の方向に不安定に動かし続けるギッシングの執拗な技法のもうひとつの例がここにもあるということになるだろう。

『ネザー・ワールド』からもひとつだけ例を挙げておくことにしよう。あまりにも人物関係と筋の展開とが錯綜し、そこに犯罪ミステリーめいた雰囲気まで加味してあるために、整然と説きほぐすことのむずかしいこの小説の中から例として取りあげるのは、ジョン・ヒューイットである。この小説の登場人物は、大別すれば、スノードン家の関係者とヒューイット家の関係者、そしてその両者をつなぐ役割をするシドニー・カークウッド他の人々ということになるだろう。この三つの系列の人物たちが複雑に交錯する中で、時代の貧困問題、貧民の救済問題、当時の新しいさまざまな思想をはらんだ言説がやりとりされるのがこの小説である。極論すれば、この作品からは貧困小説のすべての要素の他に、植民地問題や当時の演劇事情にいたるまでのいっさいを、上流社会と社交界に関わる事柄以外のいっさいを読み取ることができるとまで言えそうである。その中から取えてジョン・ヒューイットを取り出すのは、彼の占める位置の重要性和その比較的輪郭のはっきりとした人生の変転を考えたことである。

この小説の中では数少ない善人のひとりとしてよいジョンは、失業中の指物師として登場して来る。先妻との間に二人の子どもが、今の病弱な妻との間に幼い四人の子どもがいて（そのうちのひとりとは生後二週間にしかない）、文字通り極貧の生活を余儀なくされている。職探しが彼にとつての絶対の急務となる。そして新聞の求職広告で「窓拭き、掃除等」の仕事を見つけて出かけてゆくことになるが、「俺は八時半についたんだ。で、どうなったと思う？ ……五百人も押しかけてたよ！」（第三章）。それだけの苦労はしていても、この人物は紋切り型の墮落への道进行することなく、「彼はバブに出入りすることはなく、どん底の世界の悲惨さが強烈に露呈する場所へ足を運んだ。彼はクラークンウェル・グリーンンの集会では絶えず演説し、ラディカル・クラブでも演説した。そうした興奮のもたらす影響というのはひどいものではあったが、飲酒のもたらす悪ほどひどいものではなかった」（第二十一章）。多少皮肉なユーモアがまじっているようにも見える最後の文は、実はこうした労働者の運動に対する作者ギッシングの姿勢を洩らしてしまっているようにも思える。彼は間違いなく下層の人々の窮状を知っていたし、その状態を改善しようとする動きも、博愛主義の運動のことも知っていたが、そこに最終の希望を託すということとはしなかった（図②）。『ネザー・ワールド』は、ある意味では、そうした運動や努力がごとく挫折してゆくプロセスを描いた作品とも言えるのである。ギッシングの創作活動には困窮の



図② チャールズ・キーン「博愛主義者と煙突掃除の少年」『パンチ』（1876年10月7日号）
博愛主義者「ほら、1ペニーあげるよ。何に使うかね？」
煙突掃除の少年「うわっ、これ全部！二倍かゼロか、コイン投げでかけようぜ」

悲惨さをさまざまの場所に見出し、そこから脱出しようとする何人かの人物を投入し、その努力の挫折を描くことの繰り返しであったと言える部分がある——それは職を失い、職を求め、また職を求めざるをえない下層民の生活のパターンと明らかに相似形をなしているだろう。

当然のことながらと言うべきだろうが、ジョン・ヒューイットの政治的な姿勢も挫折する。「死ぬまで苦しみと貧乏しか知らなかった」妻の死後、彼はわずかながらも貯金していた金を横領してしまったことを知る。「クラブの金が盗まれてしまった。俺の金を盗んだんだ。女房の棺桶を買ってやる金さなくなっちゃった」（第二十一章）。しかし、ここで彼の人生が

終わるわけではなく、彼はただ闘いの舞台から降りて、ともかくも静かな安定を手にすることになる。

シドニーと一緒にいると、この疲れ切った反抗者も平静になった。無骨な苛立ちを浮かべた顔も、奇妙に傲りのないおだやかなものになった。結局のところ、以前ならばチャリティと呼んではずのものを受け取るようになったのだ……「それでも」彼は、いずれ不可知の恩人に感謝する日が来ますよというシドニーの主張は信用しなかった。

(第三十二章)

ジョンの娘は家出をして、地方の劇場で舞台に立っていたものの、嫉妬にかられた別の女優から顔に硫酸をあげせかけられ、人前に出るのとはばかられるほどの傷を負ってロンドンの貧民街に戻って来るが、その彼女を妻とするのがシドニーである。ジョンの静かな安定はこの青年の慈愛に由来する。

それではこのシドニーという人物は一貫して好意と善意を体现する人物として設定されているのかと言えば、決してそうではない。彼の愛自体が二人の女性の間で、つまり、この小説のヒロインとみなしてもいいジェイン・スノードンと実際に妻となる女性との間で大きく揺れ動いているのだ。

ジョン・ヒューイットにしても、彼にしても、同じこと。彼の関心の幅もしぼんでしまい、今では家族のこと、家賃、食事

代、光熱費のことしか頭になくなった。若い頃には、どん底の世界における生存競争とはどんなものか知っている気だったが、今となっては、そんな知識は空論でしかなかったという気持ちしかない。確かに、貧しい人々に向かって高い生活の理想を説くのは何でもなかった。一週間の経費にかなりの余裕があるならば。ビール屋やジン・ハウスで我を忘れようとする男女をいさめるのも、心静かに合理的な楽しみを味わうだけの余裕のあるときは、何でもなかった。

(第三十九章)

しかしシドニーに対する評価の揺れはこれで終わるわけではない。またしても揺れる。彼の人生もまた不安定に揺れ動いた挙げ句に、作品の結末では作者から次のような暫定的な評価を受けて中断することになる。

お互いの人生に祝福すべきことはほとんどなかった。彼の方は、若い頃の夢が挫折してしまい、画家にも、正義のために闘う男たちのリーダーにもなれなかった。彼女の方は立派な手本となつて社会を救う人間になることも、民衆の娘として、困窮している人々のために富を掲げることもできなかった。それでも、二人には仕事を与えられはしたのだ。他人の眼をひくことも、励まされることもないまま、ただ正直さと思いやりだけを支えとして、もつと恵まれない人々のそばに立ち、勇気をそれほどには持ち合わせていない人々の心に慰めをもたらしたの

だ。二人の住まうところは闇だけに包まれてはいなかった。必ず悲しみが二人を待ち受けていた。かろうじて立てたささやかな目標さえかなわないこともあったかもしれない。しかしそれでも、少なくとも二人の人生は、どん底の世界の深淵を崩壊で満たしてしまう社会の残酷きわまりない力へのプロテストとして残り続けるだろう。

(第四十章)

皮肉なことに、これはギッシングが書き残した最も美しい言葉のひとつであるだろう。しかしそれは決して終わりの言葉ではない。シドニーの人生にはまだ先がある——生まれてくるかもしれない子どもを妻とともに育ててはならないからだ。祖父を失い、父を失ったジェインにも先がある。彼女は生き続けねばならないからだ。そしてこのような未完結性の中断こそは、オースティンともディケンズとも違う、冒険小説の作家たちとも違う世紀末の作家ギッシングの特徴としてよい点ではないかと思われる。

第三節 遺産相続

ギッシングの小説の中で繰り返し使われるにもかかわらず、どん底の生活を描く貧困小説には場違いの印象を与えるのが遺産相続のモチーフである。オースティンの小説であれば相続という問題は田舎の地主や貴族の家柄や土地や館、そしてその周

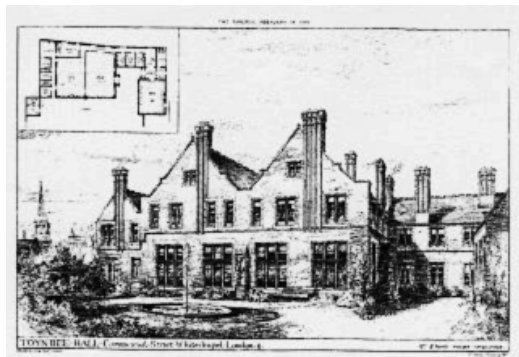
囲の共同体をただちに連想させて、結婚という主題を支えることになるだろう。しかし、ギッシングの作品の中でもこの遺産相続というモチーフが有意味な力を発揮するのだろうか。明らかに相続という問題がその典型的な役割を離れて導入されているとしたら、それは一体何を表象するためだったのだろうか。

『余計者の女たち』は、G・A・ヘンティの冒険小説にあまり劣らないほどの意外性をもった書き出しを与えられている。『アリス、明日』と、マドン医師はクリーヴドン の海辺の丘を長女と散歩しながら切り出した。『千ポンドの生命保険に入る手続きを始めようかと思つてね』(第一章)。作家である以上、書き出しには特別に神経を使うはずであるが、この書き出しはそれ以降の展開をまったく予測させず、読者を宙吊りにしてしまふことに成功する。しかし第一章の終わりのところでは、その医者が馬車の事故で早々と世を去ってしまった、第二章ではその十六年後、八百ポンドの遺産を手にした三人の娘がロンドンに出て来て借問探しをする場面から話が始まることになる。この場合の遺産は明らかに地位と生活と住居を保証するものになつておらず、ヴィクトリア時代の小説家たちが乱用した遺産相続のパターンとは異質である。家系に絡む相続の争いとも無縁である。

これに対して、「生まれついで金稼ぎ屋」で、「ありとあらゆることに投機をやつた」(第五章 兄のおかげで毎年六百ポ

ンドもの収入を得ることになったウイドソンの場合はどうかと言えば、彼の生活自体はそれによって十分すぎるくらいに保証されるものの、彼がそれを有効に活用している気配はない。モニカと結婚したあともこの遺産が有効に活用されている様子はない——例えば彼の前には、貧しい人々のための博愛的な活動のためにそれを活用するという選択肢（図③）があつたはずであるが、作者のギッシングは彼がその方向に眼を向けることを許していない。エヴァラード・バーフットにも同じような拘束がかけられている（年に四百五十ポンドを遺産分割で手にする彼は、貧しい友人の結婚式で善意を示すにとどまる）。問題は、定職も持たずに暮らせるほどの彼の境遇を支えている遺産の出所だ。彼の従姉のメアリ・バーフットはその間の経緯を次のように説明している。

彼の前に出るとなんだか悪いことをしたような気になるの。エヴァラードの父親は本来ならば彼の方に行くはずのお金をこっそり私に遺産相続させたのよ。……私の伯父は庶民のランクからはい上がった人だったけれど、そのことを思い出すのが嫌いで、自分で財産を作っておきながら、その役に立った仕事を嫌っていた。願っていたのは社会的な地位を手に入れることだけ。……エヴァラードはイートン校に行ったんだけど、あの学校がとんでもない影響を与えてしまった。彼を恐ろしくくらしいのラディカルにしてしまった。貴族のうちの子をまねるかわりに、



図③ 1884年のクリスマス・イヴに、アーノルド・トインビーを記念して、イースト・エンドのホワイトチャペルに創設された最初の大学福祉セトルメント「トインビー・ホール」（『ビルダー』1885年2月14日号）

憎んで、軽蔑したのね。もちろんイートン校からオックスフォードに進むことになっていったんだけど、その段階で本格的な反抗に出してしまった。嫌な大学なんぞに行つて役にも立たない学問を頭につめ込むなんてまっぴらだと言つて、技師になる決心をしてしまったの。……必死に働いて世界を動かしているような階級の連中と一緒にいたい、そう言つて、大騒ぎになったけれど、自分の意志を貫き通した。イートン校を出て土木工学の勉強をしたわけよ。……そのあと十八から三十近くになるま

でその仕事から離れなかったけれど、本当は大嫌いじゃなかったのかと思うわ。……それが今では不思議なくらいにラディカリズムが消えてしまった。彼は労働者階級に本当に共感することとはなかったんだと、私は思う。……もし偉いエンジニアになれる道が見えていたら、巨大な企業トップになれる道が見えていたら、彼は仕事を捨てたりしなかったでしょう。ひょっとしたら、信じられないほどの強情さが彼の人生をダメにしてみったのかもしれない……

(第八章)

ギッシングは何を考えながらこのくだりを書いていたのだろうか。ただちに分かるのは、ここでは小説一冊分に相当するプロットが語られているということである。このイートン校出の強情な人物を軸にして、彼を大英帝国の植民地での冒険に赴かせれば、G・A・ヘンティやW・H・G・キングストンの冒険小説にひけをとらないものが書けるくらいのが、彼に分からなかったはずはない、私はそう思う。そして、そのような植民地に由来する財産を活用することもできただろう。

いずれにしても、アイロニカルな精神を十分に持ち合わせていた作家ギッシングは、そのような人物を博愛的な奉仕活動に向かわせることはせず——兄の死にともなつて、彼の年収は千五百ポンドに達するにもかかわらず——その仕事を従妹に割り振ることになる。「親戚が二人、未亡人となつていた姉と伯父とがあいついで亡くなつてしまつたおかげで、彼女は相応の富

を手にするこゝになつた」

彼女は「運動」のリーダーとして名前を知られることを狙つたりはしなかったが、彼女の静かな仕事ぶりの方が、女性の解放のためにプロバガンダをやる女性たちのもかく目立つ生き方よりも、間違いなく効果的であつたろう。……肉体的に大きな力が必要とする仕事は別として、男にできることならば、女にも同じようにうまくできるはずだと彼女は信じていた。その彼女を手本として、それから彼女の財布の助けをかりて、二人の女の子が薬剤師になる勉強をしていた。別の二人は、彼女の助けをかりて、本屋を開いていた。他にも事務員をめざす何人かが、彼女の学校で実にしつかりとした訓練を受けていた。

(第六章)

われわれの時代にも受けそうな、ある種のラディカルなフェミニズム性をもつローダ・ナンの言動と対比されねばならないし、げんに作者がそのような存在として設定した彼女の言動の中にこそ、ギッシングという作家の言説世界のひとつの重心が託されているかもしれない。下層の女性たちのための転職と知的な生長のための手助けをしようとする彼女の言動の中に。派手な結婚否定論を口にしながらもエヴァラードへの想いに揺れるローダや、結婚は実現しても欲求不満に揺れるモニカのかたわらにあって、その両者と接点を持ち、そのいずれの生き方も

全面的には否定も肯定することもない彼女の言動こそ、『余計者の女たち』という小説の中の最も重要な〈奇妙な残余〉なかもしれない。「頭脳と意志のある女なら、われわれの時代の一番大きな運動の中で——女性の解放という運動の中で——名前を挙げることもできるでしょう。でも、男には何ができるの？ 天才がないかぎり」と言い切るローダに対して、彼女はこう答えるのだ。

そうね。私たちの時代には、女である方が有利だわ。私たちに
は前進する喜びが、克服する誇りがあるでしょう。男は物質的
な進歩を考えられるだけ。でも私たちは——私たちは魂を勝ち
取って、新しい宗教を広めて、この地球をきれいにできるんだ
から！

(第八章)

もちろん今、このすべてを真に受けるわけにはいかないが、少なくともここには確固たる希望と自信の表明がある。つい、「新しい宗教」と呼ばれてしまうほどのものがある。

伝統的な家名、地位、土地と館などをめぐる遺産継承の問題がオースティンやディケンズ他の小説の展開を支えた深層構造であったのに対して（推理小説も多分にこの構造を利用して成立してくる。密室殺人などのトリック重視はのちの時代のこと）、ヴィクトリア時代の後半になると、継承され相続される遺産の由来が国内的な経済活動（起業しての成功、投機での成功）か、遠い植

民地での活動（隠微な擄取、冒険的な宝探し）に移行してくる。このような経済基盤の変化に眼を向けることをしないヴィクトリア時代の小説の研究には、教養小説論であれ、社会小説論、心理小説論、フェミニズム小説論の何であれ、私には何の関心もない。逆にギッシングの小説にこだわり続けるのは、この遺産継承の実体の変化を彼が確実に見すえていたからである。

既にエリザベス・ブラウニングの長編詩『オーロラ・リー』（一八五六年）の中にオーストラリアの金か、国内での富籤に由来する遺産を国内での博愛活動に向けるという設定が組み込まれているけれども（その活動は成功しない）、植民地由来の財産を、田舎の館での静かかつ豊かな生活につなげてゆく冒険小説とは違って、都会での貧民の救済活動に接続してゆく可能性も視野においていたのがギッシングの『ネザー・ワールド』である。この小説の半分が、ジョン・ヒュイットとその周辺の人々の苦闘を書くことに費やされていることは間違いないが、残りの半分はオーストラリア由来の遺産をめぐる犯罪事件と、その遺産を有効に博愛運動に使うとして挫折する人々の描写に使われている。そもそもこのような構成を思いつくこと自体、並大抵の構想力ではないとしていいだろうが。

家族にも見捨てられてロンドンの貧民街で育ったジェイン・スノードンの前にオーストラリアから祖父が戻って来るという設定自体、あまりにも作作的な雰囲気をもつように感じられるが、さらに型破りと言っていいのが、この祖父が息子のひとり

の遺産を受けついでいるという逆説的な設定である。「息子がひと財産を築いて、あとに広大な土地と何千ポンドのお金を残していったんだ。ところが遺書がない」というわけで、祖父がそれを継承することになる。但し、彼はその遺書を抱えて、イングランドの田舎に成功者として引退するつもりはない。「わしはただの片時も自分を金持ちだなんて思ったことはない。自分の金だなんて思ったことはないよ、一度も」(第二十章)。彼は孫娘ジェインを探そう、その金を貸し人々のために使おうと決意している。つまり、異例のかたちながら、ここにも遺産継承から博愛主義的な救済活動へのルートが浮上してきているのだ。しかも彼は、自分のそのような決意を孫娘に、あたかも貴重な遺産か何かのように継承させようとする。

自分が死ぬときに、この金が、自分でも貧しい階級のひとりとして育ってきた女性によって、貧しい者たちの幸福のために使われることを信じられたら……。分かつてもらえらるだろうか。普通の形でチャリティに残すのは簡単なことだろうけれど、わしの考えているのはそんなことじゃない。ジェインに教育を受けさせて貴婦人にして、その上でこのお金をうまく使ってくれるように望むこともできたかもしれない。でも、わしの考えたのはそんなことじゃない。最近じゃあ、はじめな者に関心を持って、財産を気前よく使って下さる御婦人方もたくさんいらっしゃる。わしの願いは、貧しくて教育のない者のために、彼ら

の中から友となる人間を育てること。彼らが味わたのと同じ苦しみを経る抜け、彼らと同じように自分の手を使って生きるための糧をかせぐのに慣れていて、自分の方が彼らよりも上だと思ったりしたことがなく、彼らと同じように世の中を見、彼らの欠乏を知っている人間を、だよ。貴婦人もいいことはして下さる、それは分かっている。でもな、わしの知ってするような貧しい人間たちの友達になるというわけにはいかんだろう。

(第二十章)

この正論は十分に理解できる。しかしギッシングは一体何のために、この老人にこんな科白を吐かせたのだろうか。しかも、きわめて例外的な状況に身を置く老人に？ 慈善活動や博愛主義の活動を諷刺し、茶化すためだろうか。それとも、その更なる改善を願ってのことだったのだろうか。それとも、世紀末のイングランドで最も眼につきやすかった題材を創作上の都合からただ持ち込んだだけなのだろうか。こうした部分や困窮の描写を当時の社会的な資料とつき合わせてギッシングの自然主義的なリアリズムを云々するのは造作もないことだし、新歴史主義的なアプローチを振り回すこともやさしいだろう。しかし、作者の意図とは本当のところ何であつたのだろうか。作者の意図と言ったからといって、べつに私は旧い批評に帰りたいと思っているわけではない。この小説では、そのレトリックと構成そのものが、作者の意図なるものを、たとえ一義的な結論は出

ないにしても、考えてみることを強制しているのであって、ここではそれに反応しないということ自体が作品のレトリックを裏切る批評行為となってしまうはずである。

娘ジェインは祖父の望みに従う。そしてミス・ラントの博愛主義の活動を手伝うことになるのだが、そのことが期待された事態をもたらすことはない。

彼女の生活は家庭を守る方に向いていた。意識の高い博愛主義者とむりやり組ませるというのは、彼女を限りなくいつわりの立場に立たせるということであつた。彼女は、愛する人々の欲望に自分を合わせようとするあまり、苦しみを我慢し続け、ひとり目立っていた頃のことを思い出して、ひそかに嘆き悲しむことになるだろう。

(第二十六章)

彼女と結婚する可能性もあつたシドニー・カークウッドのこの心配は杞憂に終わる。なぜならば、祖父の予定していた遺産が彼女の手に移ることはないからだ。行方不明になっていた父がアメリカから帰国して、突然ふらりと祖父と彼女の間に割り込んでしまった挙げ句に、法律上の相続人としてそれを継承し、再びアメリカに渡ってしまうからである。しかもその財産を狙って、父は正体を隠し、かつてジェインをいじめ抜いたクレムと結婚してしまうという、何かしら策謀めいた事態にまで関与してくるとなると、犯罪小説めいた雰囲気まで漂いだしてしま

う。大金を手にしてアメリカに渡った父親は大々的な株の取引に関与して、失敗してしまう。「アメリカではよくある財政破綻のひとつが彼を完璧に破産させてしまった」(第四十章)。父は遺産を残すことなく、死ぬ。このような祖父、父、娘の関係は一体何と評すればいいのだろうか。

このような多重底的な展開を眼の前にして何か確定的なことを言い得るとするならば、それは作者の意図を一義的に特定するのは困難だということである。これはプロテスト性やメッセーじ性を強く前景化することをひとつの示差特徴とする自然主義的なリアリズムの作品では珍しいことと言うしかない。ここにあるのはいわゆる多義性や曖昧さではなく、何を言おうとしているのか決定しがたいという事実である。そして、このような決定不可能性をはらむテクストに最もなじまないのが宗教的な言説なのだ——ギッシングの小説における宗教性を論ずるには、このような迂回路を必要とする。

第四節 中心なき宗教

十九世紀末のロンドンの惨状を語るための方法のひとつは、言うまでもなく宗教の言説を経由するということであつた。それを実践してみせたジェイムズ・トムソンの『怖ろしき夜の街』(一八七四年)は、「ヴィクトリア時代の大都会におけるかつてない都市体験を神なきもの、希望なきものと規定する重要な詩

である⁽³⁾。彼の詩はどん底の世界の悲惨さをモリスンやギッシングのようなたちで活写しているわけではないが、それでも貧困、荒廃と宗教的な言説のひとつの典型的な出会い方を提示していることは間違いない。

ここは夜の街だ。死の街とも言えるかもしれないが、

しかし夜の街だ、疑いもなく。露に濡れた、冷たい灰色の

夜明けのあとに、明るい朝のかぐわしい

息吹きが来ることはないのだから。

月や星の輝きはあざけりなのか、あわれみなのか。

太陽がこの街を誘うことはない

美しい陽を浴びれば、街は消滅する。

そのような街の荒廃ぶりを描き、糾弾したあとで、場面はある聖堂の暗い説教壇に移り、そこからひとつの声が闇の中にとどろき渡る。

おお、憂苦に沈む兄弟たちよ、暗い、暗い、何と暗いことか！

舟さえもなく、暗黒の海の中でもぐのか！

おお、この汚れた夜の中をさまよう亡霊たちよ！

幾年が経つのか、私の魂はこの闇の中で血を流してきた

涙のごとくに、苦い血が私の頬を伝わった

ああ、暗い、暗い、暗い、喜びも光もありはしない！

あなたたちの苦しみを思えば、この胸は苦悶にゆがむ
あなたたちの悲しみは私の苦悶。そうなのだ、私も衰えて
倒れてしまう、祝福もなく倒れてゆく者を見ていると。

私も探しまわった、この宇宙の全体を

高きところ、低きところ、ことごとくを。必死に、

不安にあえぐ人々のわずかな安らぎを求めて。

そして今やつと嘘いつわりのない言葉を伝えよう、

死せるもの、生けるもの、すべてが認めた言葉を。

喜びにあふれるよき知らせだ、あなたたちへの、すべての人への。

神は存在しない、と。神聖な名をかたる悪魔が

我等を造り、拷問しているのでもない。たとえ嘆くとしても

それは存在者の怒りを鎮めるためではない。

ここにあるのは神の存在を否定し、困窮と苦悩をその不在によつて説明しようとする痛切ではあるものの、決して先例のなくはない対処法である。その実効力は別として、これがロンドンの惨状に立ち向かうとする宗教的な言説のひとつのあり方であることは否定できない。現実の悲惨さを前にして、ここでは超越論的な説明の失効が申し渡されているのである。最終的な神意は知り得ないとして超越論的なレベルを温存するのではな

く、その存在そのものが否定されているのだ。このような不可知論的な考え方をギッシングが知らなかったとは思えないが、彼がとつたのはそうした立場との直接対決ではなく、そのような選択肢を複数性の騒音の中にかき消してしまうという姿勢であった。根本のところで一義的な決定を迫る宗教的な言説が多方面的な言説の錯綜の中に沈められてしまうと言うよりも、浮遊させられてしまうのである。

夕暮れが近づく、現代の集会広場とも言うべきクラークンウエル・グリーンは演説する者の声が響き渡り、そのまわりには聴く者、議論をふっかける者、あざける者、無関心にうろつくだけの者が群れ集まって来た。不可知論話をする者のサークルと、祈りの集会に集まったサークルが交錯した。熱狂的な禁酒主義者のわめきがラディカルな政治運動家の叫びと混じりあつた。冷静な思考と繊細な知性を必要とする問題を少しは落ち着いて論じ合うために大きな集団から離れてゆく小グループもたくさんあった。三位一体の教義から、キャベツ対牛肉論争にいたるまで、新マルサス主義からワクチンの強制接種にいたるまで、現代という時代が大衆の前に投げ出した問題で、ここでもみくちやにされない話題はひとつとしてなかった。(第二十一章)

『ネザー・ワールド』のこの場面で特徴的なのは、宗教に関わるはずの言説も多数の中のひとつとして扱われ、明確な方向性

を与える役割を果たしていないということである。「神は存在しない」という言葉が「この宇宙全体」の悲惨さを説明しようとするのに対して、ギッシングは決してそのような一方向性の言説を許容しなかった。職探しや引越しを手始めとして、さまざまな貧困の表象を扱い、もろもろの人間関係を扱うときに、執拗なオブセツションのように彼に憑いていた終着点の見えない多方向性がここにも認められるということだ。

このような多方向性は作者を引き裂き、そして登場人物の統一性をも引き裂いてしまう。ギッシングの描き出す人物にはいわゆる教養小説的な人格の達成は見られないと断定していいかもしれないし、読後に残る何かを釈然としない未整理の印象はそのこととも関係しているように思われる。彼の作品には同時代の社会風俗に関する言説がおびただしく含まれているけれども、それを拾い出して社会的な資料とつき合わせ、その照合を指摘してみても、彼の文学に手が届くことはない。そこにあるのは多義性でも曖昧性でもなく、それぞれの部分においては明確な意味を与えられた全体としての多方向性なのだ。

そうである以上、ギッシングの描き出した世紀末の世界に宗教の話や博愛主義の運動の話が登場するのは論理的にも必然なことであるだろう。さらにそれが特定の信仰のあり方に収斂していかないというのも。

マイケル・スノードンが……いずれかの宗派に属することはな

かった。日曜の礼拝に出ることはなかったし、孫娘のジェインにそうしてほしいと願ったこともなかった。彼は聖書を道德的な教えのもととして使っていたし、日曜日の朝にはその数節と一緒に読んでいたけれども……ジェインが宗教的な精神を持つようにということを彼はつねに願っていたし、彼の人生のたったひとつの目標もそこにあったが、形式的な信仰は彼の性格に合わなかった。……彼女は人間味のあるやさしさには敏感だったし、道德的なまじめさも十分に持ち合わせていたものの、教会やチャペルや街角の宗教にはまったく心を動かされなかった。救世軍の行進にしてもなんとおかしい奇妙なものともしか思えなかった。祖父と同じで、それを拒否したりしたわけではないが、それが自分にも関わりのあり得る重大事とは思ったこともなかった。彼女は祈りの言葉を口にしたことはなかった。

(第十八章)

救世軍にせよ、セツルメント運動にせよ、さらに博愛主義の運動にせよ、ヴィクトリア時代には宗教との関わりを抜きにしては考えられなかった(図④)にもかかわらず——『ジェイゴアの少年』が一例だ——作者はその宗教的な面を黙殺する。『余計者の女たち』におけるフェミニズム色の濃い博愛主義の活動の扱い方にも同じであった。しかもその傍らに、教会史に興味を持ち、ジョン・キープルの詩集『クリスチャンの一年』(一八二七年)を愛読する女性を配していた。『無階級の人々』

の中ではウェイマークに次のように語らせている。

ばくは宗教と哲学に興味を持った。そして、いわゆる自由思想の戦闘的な弟子になった。ばくの中ではありとあらゆる種類のラディカリズムがはじけたんだ。自由思想の安い本なども買ったし、その種の新聞に投稿もした。……労働者のクラブで演説もしたさ、激しい題のついたのを。そのひとつは「合理主義の



図④ 救世軍シェルターでの礼拝

「福音」とか言ったな。

(第七章)

その一方で、同じ作品の結尾には、「伯母と姪は『真の教会』に入信したあと、ミッドランドのある町の修道女会に加わって、チャリティの仕事に生涯を捧げるつもりでいる」(第三十八章)というエピソードも書きしるすのだ。

ギッシングは博識の小説家であった。彼には目の前に展開するものをすべて小説の中に書き込むくらいの能力があったはずであるが、そして確かに多様きわまりない素材を取り上げることにはなったのだが、それらを整理して最終的にひとつの方向性を与えることはしなかった。教養小説にせよ、冒険小説にせよ、宗教小説にせよ、結末が悲劇であるかハッピー・エンドであるかに関わりなく、何らかの「終わりの感覚」を与えるのが小説の自明の前提であった時代に、彼はあまりにも多くの中絶を残してしまった。『宝島』と、当時最大のベストセラー宗教小説『ロバート・エルズミア』(一八八八年)の間の広大な世紀末の空間をさまよるのが彼の運命となってしまった。

註

(1) モリスンについては P. J. Keating, *The Working Classes in Victorian Fiction* (London: Routledge & Kegan Paul, 1971) 167-98 を参照。他に同じ著者による *The Haunted Study: A Social History of the English Novel 1875-1914* (London: Secker & Warburg, 1989) を参照。

(2) キッシングの小説については John Goode, *George Gissing: Ideology and Fiction* (London: Vision, 1978) を参照。

(3) Francis O'Gorman, ed., *Victorian Poetry* (London: Blackwell, 2004) 394.

(4) 労働者階級と宗教については Hugh McLeod, *Religion and the Working Class in Nineteenth-Century Britain* (London: Macmillan, 1984) を参照。救世軍については M. England, "The Salvation Army" in *London in the Nineteenth Century*, ed. Sir Walter Besant (London: A. & C. Black, 1909) 277-304 が興味深い記述となっている。Anthony S. Wahl, *The Eternal Slum: Housing and Social Policy in Victorian London* (1977; London: Transaction, 2002) 141-99 を参照。